

## (九) 秋の日、僧正大師を賀し奉る詩

奈良から西南約三十km圏内に、役行者（役小角）が拓き古くから靈威の宿る山とされてきた修験の山々、大和の金剛・葛城山系がある。大学寮から姿をくらましてすぐ、修行者（優婆塞）になりたての真魚こと空海がはじめて伏したのはこの山地ではなかったか。

この山は役行者のホームグラウンドで真魚の時代にはもう日本の山岳修行のメッカになっていたはずである。鎌倉時代前後には組織化された修験（頭）が盛んになり、大峯修験（密）とともに最盛期を迎えた。今の和歌山市加太沖の紀淡海峽友ヶ島（四島）を起点に和泉山脈から金剛山地に入り、金剛山・葛城山・二上山・逢坂を経て明神山北麓の亀の瀬まで、神靈が宿る二十八ヶ所に『法華経』二十八品を一巻ずつ納める経塚が祀られた。

この峰中、大和葛城山は修験道の始祖役行者が生まれそして行場を拓いた霊山で、役行者の誕生の地には七世紀前半に舒明天皇によって建立されたという吉祥草寺が現在もあり、真魚はしばしばここで衣食の世話になっていたのではないだろうか。

さらに隣の金剛山はこれも役行者のホームグラウンドだった山で、六五五年に役行者が創建したという転法輪寺（現在、真言宗醍醐派大本山）があり、今でも醍醐寺系の修験がさかんに行われている。往時、若き日の空海もここに止宿させてもらったかもしれない。

金剛山の頂からは、吉野から紀伊半島を南北に貫き熊野大社へと連なる大峯山系の山々が見える。

吉野には昔、吉野修験の進発地「柳の渡し」から吉野山とは対岸の側に比蘇（曾）寺という寺があった。今世尊寺となっている。そこが昔の吉野の入口である。この比蘇寺に八世紀前後の頃元興寺で義淵（玄昉・行基や道慈・道鏡らの師）から法相を学び三論・華嚴も修めた神叡という唐僧がいて、二十年間虚空蔵求聞持法を修してはよく成就したという。その神叡こそが真魚に求聞持法を教えた人だという話があるが、神叡は天平九年（七三七）に入滅していて、空海の若き日と時代が合わない。

ところで、大安寺と比蘇寺とは実は密接な関係にあった。当時、例えば法隆寺と福貴山寺、興福寺と室生寺のように、平地の寺院と求聞持法などの山林修行を行う山岳寺院とがセツトの関係にある結びつきがあったのである。最澄の剃髪の師といわれる大安寺の行表はこの比蘇寺で晩年を送り大安寺に帰って亡くなっている。山林修行に強い関心をもちはじめた当時の真魚が大安寺で比蘇寺の神叡のことを聞き、葛城山から近いこの吉野に足を運び神叡の消息をたずねても不思議ではない。

真魚に吉野を教えたのは元興寺の護命ではなかったか。神叡は元興寺の法相において護命の大先輩にあたる。しかもこの比蘇寺に伝わる「自然智」宗においても大先達であった

といわれる。

「自然智」宗とは、この比蘇寺を舞台に神叡らが拓いた山林修行のグループである。大  
自然のなかに身を置いて真言・陀羅尼を唱えつづけ、清浄な大自然と一体になった時自ら  
の心のなかに顕れる「一切の事物の源底をあるがままに知る」(『大日経』の「如実知自心」  
に類似)直観智をみがく雑密の一種で、元興寺や興福寺の法相僧も加わっていた。護命が  
この「自然智」宗のグループのなかにいたであろうことは想像に難くない。

空海の回想では「ここに、一沙門あり」、その「一沙門」に虚空蔵菩薩求聞持法を教え  
られたという。「一沙門」は、大安寺の勤操だと一般にいわれている。しかし別な説では、  
同じ大安寺の戒明だともいう。しかし私は、この「自然智」宗の護命か護命から紹介され  
た山の行者ではなかったかと思う。

空海はのちに天長六年の九月、「秋の日僧正大師を賀し奉る詩」と「暮秋に元興の僧正  
大徳の八十を賀する詩」の二首をたて続けに護命に贈っている。そのなかで護命を大師と  
尊称し、最澄には「子」「汝」と言い放ったのとは対称的である。空海と護命との関係は、  
これを論じる研究者も寡聞にして聞かないが、私は空海にとつて表が勤操で裏が護命では  
なかったかと思えるほど、空海にとり大きな存在だったと考える。あの時代、南都の仏教  
勢力のなかで僧正にまで登りつめた(空海は大僧都)護命の在りし日を偲ぶよすがは、今  
わずかに元興寺の裏手の小塔院の隅に残る小さな墓石だけである。

●本文・若夫 三老五更 至尊致肉袒之養 崆峒溪水 天子遺齊戒之間 況復 巖下  
投身 藪中捨位 斷臂示誠 割體表信 渴求法之思 馳殉道之慤乎 三世索哆 因  
之得果 十方如知 脩之證道

書き下し・若し夫れ、三老五更に至尊肉袒の養いを致し、崆峒の溪水に天子齊戒の間を遺

す。況んや復た、巖下に身を投じ、藪中に位を捨て、臂を断つて誠を示し、體を割い

て信を表わし、求法の思を渴し、道に殉じるの慤に馳するをや。三世の索哆 之に因

つて果を得、十方の如知 之を脩して道を證す。

私訳・あるいは、そもそも、(中国周の時代) 皇帝が臣下の元老に上半身の衣服を脱ぎ、  
父や兄に対するのと同じ礼義をもつて養い、(道教で言う) 伝説上の皇帝である黄帝が  
崆峒山に棲む千二百才の神仙・広成子に至上の道をたずねたところ、「お前の治世にな  
つて鳥は季節に関係なく飛び、草木は黄色にならないのに落葉するようになって(みな  
短命になつて)しまつた」と言われ、三カ月間溪谷の水で潔斎してまたたずねると答え  
てくれたという故事を遺している。ましてやさらに、雪山童子が雪山で修行中、それを  
見ていた帝釈天が鬼神の姿となり「雪山偈」の前半部の「諸行無常 是生滅法」を説き

聞かせ、喜んだ童子は後半部も是非教えて欲しいと懇願したところ、鬼神は今空腹なのでお前を食べたいと言ひ出し、童子はそれを承諾して「生滅滅已寂滅為樂」を聴いたあと、鬼神にその身を投じたとか、善無畏三蔵は仏道入門するのに王位を捨てたとか、中国禪宗第二祖の慧可禪師は達磨禪師に弟子入りを許されず、自分の臂腕を切り落して誠を示し入門を許されたとか、常啼菩薩は法上菩薩から法を聴きたいために自分の身体を売って供養しようとし、少年の姿になった帝釈天に、腕を切って血を出し腿から肉を切り取って献じたとか、求法の思いも渴れるほど、仏道に身をささげるのに誠心誠意であることに、心が馳せていたことは言うに及ばない。過去・現在・未来の三世の菩薩はこれによつて仏果を得、東西南北ほか十方の如来はこのことを修習して仏道を成就したのである。

※註記1…三老五更は、中国周の時代の制度で、皇帝が臣下の長老を父や兄に対する礼をもつて養つたこと。三老はもともと秦代・漢代の地方の元老の郷官であるが国の制度になった。民の教化育成にあつた。五更は、一夜を五分して初更・二更・三更・四更・五更の五更、午前二時頃から四時・五時・六時頃の時刻、寅の刻、戌夜という意味であるが、ここは中国古代の官職名。五更の時刻には朝起きてしまう年寄りを老臣に重ねたとも考えられる。

※註記2…至尊は、天子・皇帝。

※註記3…肉袒は、上半身の衣服を脱いで肌を見せる故事。敬服・歡迎・降伏の意を表す。

『史記』索隱、同じく藺相如りんそうじよ伝（刎頸ふんけいの交りなどで有名）、『春秋左氏伝』宣公一二年に見える。

※註記4…崆峒は、道教で言う伝説上の山。道教で有名な皇帝黄帝が、崆峒山に棲む神仙・広成子（『神仙伝』に出てくる）が千二百才の時に、至上の道をたずねたところ、「お前の治世になって鳥は季節に関係なく飛び、草木は黄色にならないうちに落葉するようになってしまった」と言われ、三カ月間潔斎してまたたずねると答えてくれた、という故事。

※註記5…齊戒は、水に入って沐浴し身を浄めること。

※註記6…巖下投身は、有名な雪山童子の「無常偈」（「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」）の故事。

『大般涅槃經』聖行品（第七之四）に「爾時釋提桓因。自變其身作羅刹像形甚可畏。下至雪山去其不遠而便立住。是時羅刹。心無所畏勇健難當。辯才次第其聲清雅。宣過去佛所說半偈 諸行無常 是生滅法 說是半偈已便住其前。所現形貌甚可怖畏。顧眄遍視觀於四方。是苦行者。聞是半偈心生歡喜。譬如估客於險難處夜行失伴恐怖推求。還遇同侶心生歡喜踊躍無量。

善男子。我於爾時復作是念。我今無智。而此羅刹或能得見過去諸佛。從諸佛所聞是半偈。我今當問。即便前至是羅刹所作如是言。善哉大士。汝於何處得是過去離怖畏者所說半偈。大士。復於何處而得如是半如意珠。大士。是半偈義乃是過去未來現在諸佛世尊之正道也。一切世間無量衆生常爲諸見羅網所覆。終身於此外道法中。初不曾聞如是出世十力世雄所說空義。

善男子。我問是已。即答我言。大婆羅門。汝今不應問我是義。何以故。我不食來已經多日。處處求索了不能得。飢渴苦惱心亂調語。非我本心之所知也。假使我今力能飛行虛空至躡單越。乃至天上。處處求食亦不能得。以是之故我說是語。善男子。我時即復語羅刹言。大士。若能爲我說是偈竟。我當終身爲汝弟子。大士。所說者名字不終義亦不盡。以何因緣不欲說耶。夫財施者則有竭盡。法施因緣不可盡也。雖無有盡多所利益。我今聞此半偈法已心生驚疑。汝今幸可爲我除斷說此偈竟。我當終身爲汝弟子。羅刹答言。汝智太過但自憂身。都不見念今我定爲飢苦所逼。實不能說。我即問言。汝所食者。爲是何物。羅刹答言。汝不足問。我若說者令多人怖。我復問言。此中獨處更無有人。我不畏汝何故不說。羅刹答言。我所食者唯人暖肉。其所飲者唯人熱血。自我薄福唯食此食。周遍求索困不能得。世雖多人皆有福德。兼爲諸天之所守護。而我無力不能得殺。善男子。我復語言。汝但具足說是半偈。我聞偈已當以此身奉施供養。大士。我設命終。如此之身無所復用。當爲虎狼鴟梟鷂之所噉食。復不得一毫之福。我今爲求阿耨多羅三藐三菩提。捨不堅身以易堅身。羅刹答言。誰當信汝如是之言。爲八字故棄所愛身。

善男子。我即答言。汝眞無智。譬如有人施他凡器得七寶器。我亦如是。捨不堅身得金剛身。汝言誰當信者我今有證。大梵天王釋提桓因及四天王能證是事。復有天眼諸菩薩等。爲欲利益無量衆生。修行大乘具六度者。亦能證知。復有十方諸佛世尊利衆生者。亦能證我爲八字故捨於身命。羅刹復言。汝若如是能捨身者。諦聽諦聽。當爲汝說其餘半偈。善男子。我於爾時聞是事已心中歡喜。即解己身所著鹿皮。爲此羅刹敷置法座。白言。和上。願坐此座。我即於前叉手長跪而作是言。唯願和上。善爲我說其餘半偈令得具足羅刹即說生滅滅已。寂滅爲樂。

爾時羅刹說是偈已復作是言。菩薩摩訶薩今已聞具足偈義。汝之所願爲悉滿足。若必欲利諸衆生者。時施我身。善男子。我於爾時深思此義。然後處處若石若壁若樹若道書寫此偈。即便更繫所著衣裳。恐其死後身體露現。即上高樹。爾時樹神復問我言。善哉仁者。欲作何事。善男子。我時答言。我欲捨身以報偈價。樹神問言。如是偈者何所利益。我時答言。如是偈句乃是過去未來現在諸佛所說開空法道。我爲此法棄捨身命。不爲利養名聞財寶轉輪聖王四大天王釋提桓因大梵天人天中樂。爲欲利益一切衆生故捨此身。

善男子。我捨身時復作是言。願令一切慳惜之人。悉來見我捨離此身。若有少施起貢高者。亦令得見我爲一偈捨此身命如棄草木。我於爾時說是語已。尋即放身自投樹下。下未至地時。虛空之中出種種聲。其聲乃至阿迦尼吒。爾時羅刹還復釋身。即於空中接取我身安置平地。爾時釋提桓因及諸天人大梵天王。稽首頂禮於我足下」とある。

※註記7.. 藪中捨位は、善無為三歳が王位を捨てて仏門に入った、という故事。



※註記8…斷臂示誠は、中国禪宗の第二祖の慧可が達磨に入門を断られ、腕を切り落として決心を示した、という故事。

※註記9…割體表信は、法上菩薩から法を聴きたいために自分の身体を売って供養しようとし、少年の姿になった帝釈天に、腕を切つて血を出し腿から肉を切り取つて献じた、という、「施身聞偈」の故事。

※註記10…索哆は、薩埵、サッタ (satva)、菩薩。

※註記11…如知は、如来。

●本文…粵我大師僧正親教 稟氣清了 智則逾藍 體居非巨 心則入神 三學兼洞  
六度周備 緇素之歸憑 人天之導師 一人三公 師之事之 四海六趣 父之母之  
弟子中繼 幸遇大師 執茅灑水 三十餘年于今矣 提我童耳 開我蒙心 日夕不憚  
示法門之奧義 寒暑不倦 賜成佛之徑路 一句一偈 超滿界之財 片言片字 誰忘  
捨命之恩 每念此事 寢食不安

書き下し…こ粵に、我が大師僧正親教、しんきよつ稟氣清了にして智則ち藍をあ逾えたり。體居巨に非ず

して心則ち神に入る。三學兼ね洞し六度周く備わる。緇素の歸憑にして人天の導師たり。

一人三いちじん公こう之のを師しとし之のに事ことえ、四しか海かい六ろく趣しゆ之のを父ちちとし之のを母ははとす。弟子ちゆうけい中ちゆう繼けい、幸さいいに大師だいしに遇あひ茅かやを執とつて水みづを灑そそぐこと、今いまに三十餘年さんじゆねんなり。我われが童耳どうじを提もち我われが蒙心もうしんを開ひらく。

日ひ夕ゆふを憚はばからず法門ほふもんの奥義おくぎを示しし、寒暑かんしよを倦うまず成佛ぶつじやうの徑路けいじよを賜たまう。一句いちご一偈いちが滿界まんがいの財さいを超こえ、片言へんげん片字へんじ誰たれか捨命しゃみやうの恩おんを忘れん。此こゝの事ことを念ねんう毎まいに寢食安しんじくあんからず。

私わが訳やく…ここに、わが偉大ゑだいなる師匠しじやうである護命僧正ごみやうそうぢやう、親おやしき師し、生なまれつきの氣質かちしつは清廉せいぜんかつ明晰めいしつにして、智慧ぢゑはその師しをしのぎ出藍しゆらんの誉ほめれ高く、体てい軀くは大きくはないが、心こゝろには神妙しんめう・神聖しんせいな不可思議ふかぎさがある、戒かい・定ぢやう・慧ゑの三学さんがくを兼ねつらぬき六波羅蜜ろくはらみつを具備じゆびしている。出家しゆけ在家ざいけを問わずその拠より所しよ（依止師いしし）であり人間界にんげんがい・天界てんがいの導師だうしである。天皇てんかうや太政大臣たいていだいじん・左大臣さだいじん・右大臣みぎだいじんは僧正そうぢやうを師しとして仕つかえ、世界中せかいぢゆうそして六道むだうの衆生しゆじやうは僧正そうぢやうを父母ふぼとしている。弟子しし空海くうかい、幸さいいに大師だいしに遇あひ、茅かやを取とつてきて床とこに敷しき、土間どまに水みづを注ついで清きよめること（身み近ぢかにお仕つかえすること）もう三十余年さんじゆねんである。私わがの稚拙ちせつな耳みみ（未熟みじくな理解力りかいりき）に手てをかけて道理だうりに暗くらい心こゝろを開ひらいてくれたし、昼夜しゆくゐを分わかたが密法みつぽうの奥義おくぎを教示きやうじし、寒暑かんしよを問とわず即身成仏じやくしんじやうぶつの直路ぢゆくを伝授でんじゆしてくれた。口くちから出る一句いちご一偈いちがは世界中せかいぢゆうの宝たからであり、その一言いちご一字いちじに身命みんがを惜おぼしまし教きやうえ導だういてくれる法恩ほふおんを忘わすれるはずがない。

このことを思うたびに寝ることも食べることも落ち着かないのである。

※註記1…親教は、親しい師。護命のこと。

※註記2…稟氣は、生まれつきの氣質。

※註記3…清了は、清廉明晰。

※註記4…藍は、『荀子』勸学篇第一の冒頭にある有名な「出藍の誉」(「君子曰 学不可以

已 青取之於藍 而青於藍 冰水爲之 而寒於水」)

※註記5…體居は、体軀、身体のたたずまい。

※註記6…神は、神聖なもの、人知ではわからない不思議な超自然の力。

※註記7…三學は、戒(学)・定(学)・慧(学)。

※註記8…洞は、洞察すること。

※註記9…六度は、六波羅蜜。

※註記10…緇素は、前述。黒(衣)と白(衣)、転じて出家と在家。

※註記11…歸憑は、もとに帰ることと憑りつくこと。転じて抛り所。

※註記12…一人三公は、天皇と太政大臣・左大臣・右大臣。

※註記13…四海は、前述。須弥山を囲む四方の海。転じて世界。

※註記14…六趣は、前述。六道。

※註記15…弟子中繼は、護命の弟子。空海のこと。

※註記 16…童耳は、子供のような耳。

※註記 17…蒙心は、道理に暗い心。

※註記 18…滿界は、世界中。

※註記 19…捨命は、身命を惜しまず教え導く、の意。

●本文…加以 大師 壽則隣重耳 現生之壽 齡則及釋尊示終之年 一喜一悲 心魂

易感 謹捧十八種之道具 表不共之佛法 調二四音之伎樂 顯正道之法味 伏乞

大師 慈哀納受 于時 天氣清 山林錦 蜚沈壁傍 鴈翔雲端 松竹懸琴 桂影瑩

鏡 對斯節物 誰不述懷 乃賦詩曰

書き下し…加以、大師、壽則ち重耳の生を現わす壽に隣し、齡則ち釋尊の終りを示す

の年に及ぶ。一喜一悲、心魂感じ易し。謹んで十八種の道具を捧げ、不共の佛法を表す。

二四音の伎樂を調え、正道の法味を顯わす。伏して乞う、大師、慈哀納受せんことを。

時に天氣清らかにして山林錦なり。蜚壁の傍に沈み、鴈雲端を翔ぶ。松竹琴を懸け、

桂影鏡を瑩く。斯の節物に對え、誰か述懐せざらん。乃ち賦の詩に曰わく、

私訳・加えて大師は、長寿を全うした老子がこの世に生まれたという八十一才に一つだけ足らず、齡は積尊の示寂の年令に及ぶ。あるいは喜びあるいは悲しみ、心の惹は感じやすい人である。謹しんで十八種類の日用品や法衣類を差し上げ、凡夫・声聞・緣覺とは共にならない大乘の立場から意を表わした。(また余興に)八音の調べを奏し技芸面の舞樂を演じ、サトリへの道の妙味を顯わした。伏して願わくは、大師、私の微志を広い心で思いやり受けとめてくださらんことを。時に、天氣晴朗にして山林は錦の如き紅葉である。こおろぎは壁のそばで集き、雁は雲の端を飛んでいく。松竹は琴のように風に鳴き、澄んだ月の光は鏡を磨いたように明るい。この秋の季節の風物に答えて誰も想うところを述べないではいられないのである。そこで、賦の詩文にして申し上げる。

※註記1・重耳は、『神仙伝』で言う老子のこと。

※註記2・十八種は、大乘の僧が身辺に置く十八物。楊枝・澡豆(豆の粉で作った洗い粉)・

三衣(九条あるいは二十五条の袈裟(大衣)と七条袈裟と五条袈裟)・瓶・鉢・坐具・錫

杖・香炉・瀉水囊（水を瀉す袋）・手巾（手拭き）・刀子（小刀）・火燧（火打ち石）・

鑷子（鼻毛抜き）・繩床（繩で作った座具・いす）・經本・戒本・仏像・菩薩像。

※註記3…不共は、大乘のこと。凡夫・声聞・縁覚と共有しない、の意。

※註記4…二四音は、八音。金・石・糸・竹・匏（ふくべ）・土・革・木。

※註記5…伎樂は、伎芸面をかぶって舞う舞樂と音楽を担当する雅樂による演奏。

※註記6…正道は、八正道。サトリへの道。

※註記7…慈哀納受は、広い心で思いやり受けとめること。

※註記8…桂影は、月に桂の木が生えている伝説。月の光、の意。

※註記9…賦は、一般に韻を踏んだ詩、の意。あるいは、漢文の韻文体。故事や成句などを交じえ、対句を多く用い自分の感想などを述べる詩文。

●本文…秋風颯々飄黄葉 桂月團々泣白露 蟲響悲哀愍草間 鴈聲斷續疎天路

大師今歲臨重九 經論講談幾許度 悲智津梁比舟筏 怨親兼愛濟縑素

提我童蒙灑醍醐 開余生誓示正路 粉身碎體何能答 唯憑風疾白牛輅

天長六年九月十一日

書き下し…秋風颯々として黄葉を飄し、桂月團々として白露に泣く。

蟲の響きの悲哀草の間に愍み、鴈の聲の斷續天路に疎なり。

大師、今歳重九に臨み、經論を講談して幾許の度か。

悲智の津梁舟筏に比べ、怨親兼ね愛して緇素を濟う。

我が童蒙を提ちて醍醐を灑ぎ、余の生瞽を開いて正路を示す。

身を粉にし體を碎くも何ぞ能く答えん。唯だ風疾くして白牛の輜轆を憑むのみ。

天長六年九月十一日

私訳…秋風がささつと吹いて落葉を舞い上がらせ、月は円くして（侘しさの）涙にその影を映す。

虫の音は（短い命の）哀調を帯びて草間に哀れみを響かせ、雁が斷続的に啼く声は  
大空の飛行路にまばらである。

偉大なる師は、今年八十一才になろうとしているが、經典論書を講じること多く、もう幾たびになるだろうか。

大悲と智慧の橋渡し（Ⅱ護命）は、彼岸に至る舟を連ねた筏（Ⅱ方便）に等しく、怨恨と親愛をともに愛して出家・在家を救う。

私の稚拙な（仏法を聴く）耳や道理に暗い心に手を差し伸べて、仏教の奥義（醍醐味）を注ぎ（教え）、私の生来の（仏法に対する）盲目を開いてサトリへの正しい道筋を示してくれた。

身を粉にし身体を砕いて励んだとしてもその恩に答えることができない。ただただ、『法華経』の「三車の火宅」に言う大白牛車（法華一乗）のように、密教一乗の風を速く吹かせるだけである。

※註記 1 .. 颯々は、風が小気味よく吹く様。

※註記 2 .. 飄は、舞い上がる風、風に吹かれて舞い上がる様。

※註記 3 .. 桂月は、月、月の光。

※註記 4 .. 團々は、月が円いこと。満月。

※註記 5 .. 重九は、九を重ねて九九Ⅱ八十一。重陽の節句とはちがう。

※註記 6 .. 悲智は、大慈悲とサトリの智慧。

※註記 7 .. 津梁は、橋渡し。



※註記 8 .. 怨親は、怨みや親愛。

※註記 9 .. 緇素は、前述。黒の法衣と白の法衣、転じて出家と在家。

※註記 10 .. 童蒙は、前述。童は童耳、蒙は蒙心。

※註記 11 .. 生瞽は、生まれながらの盲目。

※註記 12 .. 正路は、サトリへの正しい道筋。

※註記 13 .. 風は、密教の風、ととる。

※註記 14 .. 白牛輅は、『法華経』譬喩品に説かれる有名な「三車火宅の譬え」に出てくる

大白牛車。法華一乗の教え。『法華経』の喩え。ここは、法華一乗に喩えた密法ととるべきだろう。